



## 日本音楽教育学 ニュースレター

### 目 次

平成 16 年度会長選挙結果報告 .....	2	
平成 16 年度理事選挙結果報告 .....	3	
平成 16 年度第 2 回常任理事選挙結果報告 .....	4	
ISME 50 周年 第 27 回テネリフェ大会特集		
ISME 50 年と日本 (谷口雄資) .....	6	
ISME 理事としての 4 年間をふり返って (村尾忠廣) .....	7	
ISME 50 周年記念オープニングセレモニーから (阪井恵) ....	9	
リサーチセミナー報告 (小川容子) .....	10	
Music in Cultural, Educational & Mass Media Policies in Music Education 及び Community Music Activity ~二つのコミッション・レポート~ (滝沢達子) .....		12
MISTEC (学校の音楽教育と教員養成委員会) 第 14 回セミナー に参加して (杉江淑子) .....		14
VIVA ISME 2004! (加藤いつみ / 尾藤弥生 / 近藤真子 / 鈴木慎一郎 / 渡邊仁美) .....		15
第 35 回全国大会のご案内 (坪能由紀子) .....	18	
院生フォーラムのご案内 .....	18	
平成 15 年度修士論文題目 (追加) .....	19	
編集後記 .....	19	

平成 16 年 7 月 10 日

日本音楽教育学会会長選挙結果報告

日本音楽教育学会会長  
村尾忠廣 殿  
日本音楽教育学会理事 殿

日本音楽教育学会理事選挙管理委員会  
委員長 井口 太

日本音楽教育学会会長選挙の結果を下記の通り報告いたします。

記

有権者数：1,292

当選者（得票数）	次点者（得票数）	総票数（人）	投票率（％）
坪能由紀子（328）	なし （候補者1名のため）	362	28.0

総投票者数：362 票（内白票 18，無効 16）

日本音楽教育学会理事選挙管理委員会

委員長 井口 太 印  
副委員長 福嶋 省吾 印  
委員 中館 栄子 印  
" 木間 英子 印  
" 本多 佐保美 印

平成 16 年 7 月 10 日

日本音楽教育学会理事選挙結果報告

日本音楽教育学会会長  
村尾 忠 廣 殿  
日本音楽教育学会理事 殿

日本音楽教育学会理事選挙管理委員会  
委員長 井 口 太

日本音楽教育学会理事選挙の結果を下記の通り報告いたします。

記

有権者数：1,292

地 区	当選者		次点者	総票数（人）	投票率（％）
北海道	寺田 貴雄		浅井 良之	18/47	38.3
東 北	降矢美彌子		丸林実千代	19/76	25.0
関 東	加藤富美子	佐野 靖	井口 太	133/518	25.7
	山本 文茂	阪井 恵			
	今川 恭子	熊木 眞見子			
	島崎 篤子	小山 真紀			
	八木 正一	宮野モモ子			
北 陸	小川 昌文	篠原 秀夫	中山裕一郎	25/79	31.6
東 海	南 曜子	村尾 忠廣	北山 敦康	38/111	34.2
近 畿	岩井 正浩	嶋田 由美	牧野 淳子	47/179	26.3
	安田 寛	若尾 裕			
中 国	奥 忍	小川 容子	権藤 敦子	31/106	29.2
四 国	田邊 隆		長島 真人	12/46	26.1
九 州	岩崎 洋一	木村 次宏	松本 正	32/120	26.7

総投票者数365 票（内白票 0 ，無効12 \*）

\* 地区不明のための無効 10 ，記載事項の無効 2

投票率 28.3%

日本音楽教育学会理事選挙管理委員会

委員長 井 口 太 印  
副委員長 福 嶋 省 吾 印  
委 員 中 館 栄 子 印  
" 木 間 英 子 印  
" 本 多 佐保美 印

## 平成 16 年度第 2 回常任理事会報告

### 平成 16 年度第 2 回常任理事会

日時：平成 16 年 6 月 26 日（土）14:00-

場所：日本女子大学

出席：村尾・平井・坪能・北山・筒石・加藤・重嶋・島崎・杉江・藤沢・丸山

欠席：（奥）

#### 【報告事項】

##### 1) 会務報告（北山事務局長）

平成 16 年 4 月 24 日以降の会務報告がなされた。

5月8日 第1回編集委員会（東京芸術大学）  
第3回選挙管理委員会  
（東京学芸大学）

6月5日 選挙人名簿確定作業（事務局）  
13日 選挙投票用紙発送（東京学芸大学）  
20日 音楽教育事典団体購入締切  
（76冊の申し込みがあった）

22日 第35回大会口述発表締切

2) 第35回大会（武蔵野音楽大学）について（坪能大会実行委員長，島崎実行委員）  
日程案，プログラム案が報告された。  
（大会プログラム参照）

- ・基調講演：キース・スワンウィック
- ・シンポジウム：「再び，音楽教育学とは何かを問い直す」

パネリスト：徳丸吉彦（放送大学）

佐野 靖（東京芸術大学）

森田恭子（武蔵野音楽大学）

西平 直（東京大学）

企画：山本文茂（東京芸術大学）

- ・ミニ・コンサート：武蔵野音楽大学
- ・研究発表：口頭発表62，共同発表：5，プロジェクト研究：1
- ・プロジェクト研究：常任理事会企画テーマ「新しい学習評価と音楽科の学力」

##### 3) 第36回大会について（平井副会長）

2005（平成 17）年 10 月 29 日（土）・30 日（日）に沖縄県の琉球大学で開催予定。台風等で交通手段への影響が出た

場合等のマニュアルを作成しておく必要があることが提起された。これに対し，これらを含めた何らかの申し合わせを大会実行委員会との間で交わしておきたいということが会長から提案された。（申し合わせの内容・方法については今後検討 協議事項 2 と関連）

##### 4) 第8回音楽教育ゼミナール 2005 について（重嶋理事）

2005（平成 17）年 8 月下旬に 3 日間，新潟県妙高高原町で開催予定

・実行委員会メンバー

実行委員長：重嶋博（聖徳大学大学院）

事務局長：小川昌文（上越教育大学）

会計責任：齋藤忠彦（信州大学）

委員：伊野義博（新潟大学）

中山裕一郎（信州大学）

森下修次（新潟大学）

内田素子（上越市立常北中学校）

##### 5) 夏期ワークショップについて（坪能副会長）

・本年 8 月 26 日（木）・27 日（金）に東京学芸大学音楽科ホールで開催予定

講師：西瀧昭子（26 日）「邦楽器で音楽をつくる」

丸山忠璋（27 日）「心を音で紡ぐ - 療法的音楽活動のすすめ - 」

・第 16 号ニュースレター送付時（6 月末）に案内・申込用紙を送付することが確認された。

##### 6) 各種委員会報告

###### (1) 選挙管理委員会

7 月 10 日に会長選挙・理事選挙の開票

作業。その後、委員長から会長への開票結果報告を受け、ニュースレター（第17号・8月末）に結果を報告することが確認された。

#### (2) 編集委員会（坪能委員）

下記の7件の報告がなされた。

・『音楽教育実践ジャーナル』については、「原著」という観点で問題が起こりつつある。

・メールによる会議をこれまでより増やす。

・『音楽教育学』大会特集号にはシンポジウム・基調講演・プロジェクト研究を掲載する。

・『音楽教育学』の注記を脚注方式へ変更する（『音楽教育実践ジャーナル』については検討中）

・次期『音楽教育実践ジャーナル』の特集タイトルは「鑑賞教育を問い直す」（12月20日締切）

・『音楽教育学』第33巻第1号は『音楽教育実践ジャーナル』第2巻第1号と同時に発刊し、8月末に送付する（発刊遅延について、6月末送付のニュースレター同封文書で知らせる）。

・『音楽教育実践ジャーナル』が6月に学術刊行誌として認定された。

(3) 30周年記念事典編集委員会（事務局）贈呈者、団体割引購入者への発送作業を事務局で行い、音楽之友社に費用を支払うこと、贈呈者以外の非会員執筆者に原稿料を支払うことが確認された。（贈呈費用と原稿料、それに関わる郵送料については学会基金を充当する）

#### 【協議事項】

- 1) 会長・役員選挙について（村尾会長）
  - ・新会長のもとで第4次「学会運営検討委員会」を設けて検討してもらうように、現会長から新会長に申し送る。
- 2) 大会運営・会計処理方法の成文化について
  - ・素案（杉江理事）にもとづき検討。今

後、継続して審議することとされた。

#### 3) 事務局業務の簡素化について

・村尾会長、北山事務局長、事務局滝浦さんの3人で協議し、発送業務の外注等、簡素化・合理化を進めることが了承された。

#### 4) 新入会員及び退会者の承認

新入会員：下記の3164番～3185番までの22名を承認

- 3164 小室亜紀子
- 3165 柳田 加代
- 3166 大塚 博子
- 3167 八杉 忠利
- 3168 川西 孝依
- 3169 菊池 誠子
- 3170 内藤 梓
- 3171 丹羽 健夫
- 3172 広田亜希子
- 3173 古川 和美
- 3174 藪中 征代
- 3175 太田真紀子
- 3176 大湊 勝弘
- 3177 青木 俊彦
- 3178 二宮 貴之
- 3179 在原 泉
- 3180 小杉 裕子
- 3181 渡辺真理子
- 3182 浅見香奈絵
- 3183 成田 和代
- 3184 朝永 菜月
- 3185 程 煌

申し出退会者：1名を承認

- 2501 長谷川 勉

（6月26日現在：1617名）

#### 5) その他

・学会のホームページから学術情報センターの教員公募のページにリンクを張ることが提案され承認された。（北山事務局長）

・音楽文献目録の文献探索作業がこれまでボランティアで行われていたが、学会から、何らかの費用負担をすべきではないかとの問題提起がなされ、執行部で検討することが承認された。（坪能副会長）

・次回常任理事会：平成16年11月12日（金）

# ISME 50 周年 第 27 回テネリフェ大会特集

## ISME50 年と日本

谷口雄資（武蔵野音楽大学）

ISME（国際音楽教育協会）の第 26 回世界大会が、本年 7 月スペインのテネリフェにおいて開催された。世界の音楽教育者が一同に集い知見を交換し合う場として、1953 年に設立された ISME が、2003 年に創立 50 周年を迎え、その記念式典が本年の世界大会において催された。

記念式典では、これまで ISME 会長を勤められた方々の偉業を讃え、歴代の会長の名前と業績を紹介しながら、その代理者が本人によって ISME 旗を順次手渡していくものであった。光栄にも私は、アジア諸国を代表し初めて日本人として会長を勤められた故福井直弘氏の代理として、この記念式典に参加することができた。舞台上で ISME 旗を手渡して行く間に、ISME の歴史の中で日本の先達者たちが、その地位を徐々に確立していかれた情熱とたゆまない努力に深い敬意の念を覚えた。

これまでの 50 年の歩みを、日本人で ISME の役員を勤められた方々を中心に概観してみると、大まかに三つの世代に分けられるのではないだろうか。

第一世代には「英語を話さないで日本の地位を確立した世代」として、福井直弘氏と浜野政雄氏の名前をあげることができるであろう。ISME 名誉会長であった、故フランク・キャラウェイ氏から「役員会の席で、世界大会を東京で開催することができないかとの強い要請に、福井は一晩で日本の関係者と協議しその開催を決断した凄い男だ」と何度も聞かされた。そしてその後、1963 年に開催された ISME 東京大会の緻

密な運営と大会に関わった人々の努力と素晴らしいチームワークによって、日本への信頼と尊敬の念が大きくなり ISME の中で確固たる地位を築くことになった。福井氏はドイツ語は堪能であったが、「英語は苦手だよ、だから閉会式でドイツ語で挨拶したら大喝采で迎えられた」と話しておられたし、浜野氏は「役員会に出ても俺とロシア人は何にも分からなかったよ」と宴席で冗談まじりに伺ったことがある。

第二世代として「英語を話し始め ISME の舵取りに奮闘した世代」。これは会長を勤められた高萩保治氏、役員として活躍された福井直敬氏、三好恒明氏、村尾忠廣氏に代表されるのではないだろうか。当初 ISME はヨーロッパ圏を中心に運営されていたが、徐々にアメリカやオーストラリアにその比重が移り始め、多くの国々が参加するようになった。しかしそれは取りも直さず、各国間に軋轢が生じ、さまざまな国際的な問題が引き起こされる要因ともなった。その国際的な舵取りに活躍したのが、第二世代である。その間に、第三世代とも言うべき「英語圏で学位を取得し研究領域で積極的に活躍する世代」が生まれた。各国の研究者と共同研究を行い、英語圏の研究者と互角に研究発表ができるまでに成長してきたことは嬉しい限りである。これらの方々が、これまで日本の先達者が築いてこられた業績を礎に、今回の役員選挙で選ばれた、奥忍氏を中心に、ISME のさらなる発展に寄与されることを衷心より願うものである。



1963年 ISME 東京大会（写真提供：谷口雄資）

## ISME 理事としての4年間をふり返って

村尾忠廣（愛知教育大学）

ふり返ってみるとあの苦しかった最初の2年間の方が楽しく思い出されるから不思議なものである。

### 【ボス湖会議】

送信ボタンを押す瞬間に身震いしたことを昨日のように思い出す。

日本，アメリカ，オーストラリアの反対を押し切って断行した ISME 改革は完全に失敗し，財政もメンバーも破局状態に陥っていた。当然，この改革を断行した会長の責任が問われるべきである。しかし，メールで翌日きた恐るべき年次報告に対し誰も

抗議しない。私は理事全員に長いメールを書き，一刻もはやく，オランダのユトレヒト事務所を閉鎖しなければならないし，また，メンバーシップも元の2年更新にもどすべきである，と主張した。そのメールを送信するキーボードの感触が昨日の記憶のように思い出されるのである。

そんな思いをして送信したのに誰からも返事がなかった。重苦しい気分でノルウェー，ボス湖の会議にのぞんだ。が，状況は一変した。執拗に抵抗する会長，前会長に対し，多数決を求めた。そして，ユトレヒト事務

所の閉鎖とオーストラリア，キャラウェイセンターへの移行，そしてボランティア事務局長や2年のメンバーシップを決定したのである。決定までに，新理事たちとボス湖を歩きながら対策を練った。その光景もまたずっと記憶に残っている。

#### 【ギャリー会長の選出】

4年前の改革に一番反対していたのは財務担当理事の Gary McPherson であった。そのために彼は実質解任されてしまったのである。ISME の再建には彼を会長として復活されるほかない。担ぎ出そうということになった。ベルゲン大会で彼が次期会長選挙に当選した後，ギャリーとともに改革に猛反対してきたウェンディ（W. Sims），グラム（G. Bartle）と3人で乾杯をした。ウェンディの乾杯の言葉が未だに忘れられない。"Unfortunately we were right!"

ギャリーが次期会長として入ってきてからの理事会は雰囲気が一変して楽しくなった。テネリフェ島でとった写真がその様子を伝えている。ただ一つ残念であったのは，理事としてもっとも私が熱心に取り組み，ほとんど決定していた北京2006年大会がキャンセルされてしまったことである。

#### 【2006年クアラルンプル大会から2008年オリンピック北京大会へ】

ISME 再建の最大の方法は，世界最大の音楽教育人口のある北京で，2006年大会を実現することではないか。理事会で私は何度もそう述べ，実際，北京中央音楽院の教授たちを通じて開催の確約を取り付け，北京にまで足を運んですべてのお膳立てをつくっていたのである。ザルツブルグなど他の立候補都市が断念したこともあって，北京大会は決定した。2006年大会の会長であるギャリーにも北京に行ってもらい，会場の視察も終え，後は契約をかわすだけとなっていた。が，私が臍臓摘出という大

病で入院している間に，何と北京大会がキャンセルされてしまったのである。いつまで待っても，何度催促しても契約書を送ってこなかったという。困ったギャリーがマレーシアから来ている学生を通じてクアラルンプル開催の可能性を探り，その結果急遽2006年大会がクアラルンプル開催に変更されることになった。

たしかに，北京の3人の教授は行動があまりにも遅い。主任教授が英語を話せないこともあって，何度もメールし，最後にはファックスを立て続けに送らなければならなかった。ところが，香港の第3回アジア太平洋音楽教育シンポジウムで知り合った中国音楽教育学会の会長 Xie Jiaxing はすべてが対照的である。今年のテネリフェ大会では，Jiaxing に再会した。彼は中国音楽教育学会を ISME の中国支部として加入させ，そして，次の大会を北京で開きたいという。私は，近隣のアジアが2度続くのも問題だし，次はかねてからずっと候補に挙がっていたブラジルだろうから2010年大会にしたらどうか，と答えた。が，彼は，2008年のオリンピック共同事業としてやりたい，というのである。私はすぐさま，2006-2008期の会長に当選したばかりのリエン（Liane Hentshcke，ブラジル）に話をした。（リエンとはボス湖会議で共闘した仲なので何かと話しやすい。）彼女は，ブラジルは2010年大会を目指すので2008年大会は北京を応援したい，と答えた。それで，シエ（Xie）をリエンに紹介し，二人の話し合いでリエンが近々北京を訪問することが決まった。ギャリーはもちろん北京支持である。私の念願であった北京大会は今度こそ実現することになるだろう。

#### 【再び飛躍し始めた ISME Hiro から Shinobu へ】

リーダーが変わるとこうも違うのだろうか。50周年記念テネリフェ大会は80ヶ国もの参加で一気に活気づいた。財政は急速に黒字に転じ、ISME加盟国、会員数も急激に増えてきている。マレーシア、北京大会と続けば近隣のアジア諸国を巻き込んで大きな飛躍をすることは間違いないだろう。経済の復活にともなってロシアから若い研究者が多く参加するようになったことも今後の大きな活力となるに違いない。こうしたいい時期に奥忍さんが私と交代してISMEの新しい理事に選出された。幸いShinobuは事務局長のJudyと非常に親し

い仲にある。閉会式を終えた後、ギャリーが人事のことで相談にきた。退任した後も相談にきてくれることが私にはうれしい。すぐには決まらなかったが、その後Shinobuが理事の中からただ一人、Executive memberに指名されることになった。新しいISME執行部は前会長、次期会長と共にGary-Judy-Shinobuというトライアングルの中で動き出すことだろう。私がやり始めた北京大会を含め、アジア地区のISME発展のためにもShinobuの活躍に大いに期待したい。ギャリーには改めて感謝である。

## ISME 50周年記念オープニングセレモニーから

阪井 恵（明星大学）

テネリフェ・アウディトリアは、建物の鳥瞰図によれば巨大なイカのような形をしているらしい。しかし正面から見る姿は、頭をもたげた巨大竜鳥のようにも見える。碧紺の海・群青の空・白い雲を背景に置かれた銀色に輝く物体は、星新一の短編にある、宇宙人の「おみやげ」を連想させる。7月12日午前、この不思議な建物の心臓部をなすシンフォニーホールに、私は座っていた。

深夜にテネリフェ空港に到着した私の預託荷物は、同じ飛行機には乗っていなかった。この地では手違いが多いと聞いている。少し遅れて着けばよいのだが、なんだかイヤな予感がする。今回の発表資料の一部や、資料を整えるための道具一式が入っているのだ。困ったなあ、もし届かなかつたらどのように動けばよいだろう。主にスペイン語と英語字幕によって進行する一連のセレ

モニーを、そんなわけで私は考え事のうちに過ごした。しかし！

やがてセレモニーのクライマックス、原色の長い布に包まれた女性たちがステージ両袖からゆっくりと転がりながら登場。私は、ゆるやかに始まった音響に身を委ね、彼女たちはステージの袖に長く引く布から、いったいいつ抜け出るのかなと、視覚の世界に捉えられ始めた。5人の女性が引く帯状の布は、カナリア諸島に伝わる五弦楽器ティンプレを象徴するのだろうか。

パフォーマンスは、音・音楽・舞踊・演劇・映像のコラボレーションで、時々刻々様態を変えていく。いにしえから伝わる、植物の実を打ったり擦ったりする音、指笛による交信など、プリミティブな表現と、洗練されたアコースティック楽器による表現、現代のテクノロジーを駆使した表現までが、融和的に共存している。古典的なジュー

グのリズムにも、古いカナリアンダンスを基にした現代的なステップ、そして18世紀的なドレスの足元はウェスタンブーツ？

場面はパントマイム風に変わり、人々が交互に登場する。忙しくケータイを使うビジネスマン、恋人を探す若者たち、行きかう通行人の表情は現代の都会そのものだ。ステージ奥のスクリーンに、映像が加わる。風景や植物を素材に構成されたシャープな映像に向かい、ステージでは、木の枝を杖にしてゆっくり山に入る人や、夜空に弧をえがき静かに飛んでいく、指笛のメッセージを送る人のパフォーマンスが展開する。さまざまな時間の流れが交錯しあう摩訶不思議な時空である。古代と現代・古い世代と新しい世代・自然と人工、それは自由に

行き来して交信することが可能で、融和さえするものでありたいという、心の底の願いが溶け出すようで胸が熱くなった。

最高の人材を使ったことが伺われるコラボレーションであり、細部の一つ一つは非常にハイレベルであった。にもかかわらず、鑑賞している者にとって、少しの押し付けがましきもない。特に音響面のプロデュースは見事で、対象に入り込んで非日常の世界に遊ぶ、という体験を満喫できたショーである。おお、荷物の心配などはすっかり忘れてしまった。夜10時、地元のTV局もこのイベントを熱く報道した。キシエラ・エンテンデル・エスパニョル！スペイン語、分かりたい！

## リサーチセミナー報告

小川容子（鳥取大学）

第20回リサーチセミナーは、ラスパルナス（グランカナリア島）で開催された。グランカナリア島は、カナリア諸島の一つであり、リゾート地として有名である。紺碧の海、どこまでも青い空、シュロ・椰子類の街路樹（雨がほとんど降らないため、海水を濾過して人工的に給水している）、賑やかな繁華街、サボテン以外の緑がほとんど生えていない溶岩肌の中々、そして映画「猿の惑星」のシーンを思わせる茫漠と広がる大地……。ビーチで歓声をあげている観光客達を横目に、リサーチ恒例の合宿セミナーは、7月4日から10日まで、1週間にわたっておこなわれた。以下、簡単に概略を報告する。

今年は、27本（当初は30本受理されて

いたが、都合により3名欠席）の論文について、討論が重ねられた。1本の論文につき、発表時間15分、フォーマルディスカッション30分、インフォーマルディスカッション1時間、1日平均5-6本の発表というスケジュールは、すっかり慣れたとはいえず、やはり厳しいスケジュールである。その上、事前に全30論文を熟読し、質問事項を用意し、まくし立てる英語ネイティブスピーカー達とディスカッションをおこなうのは、かなりの緊張感を伴う。だからこそ、終わったあとに充実感と達成感が得られるのではあるが。

今回のリサーチセミナーの研究傾向は（1）教育現場を意識した実践的な論文の増加と（2）国際比較の視点を取り入れた

論文の増加の2点にまとめることができる。つまり、厳密な実験計画に基づいた実験室実験はすっかり影をひそめ、ビデオ観察、インタビュー、質問紙調査、ショーケース等による質的追求を重視する研究スタイルが大勢を占めた。個人的には、こうした研究方法や手続きは、明らかにすべき目的に応じて吟味するべきであり、研究方法に関する検討がまだ不十分であるという指摘をしたい。次に、個人的に興味深かった論文について簡単に紹介する。

まず、ハーグリーブス (D. Hargreaves) 達の研究結果を再検証したボブ (Robert Walker) の研究。ボブは、若者のクラシック音楽離れについて研究をおこなったハーグリーブス達のデータを再分析し、彼らの結論が非常に表層的であることを指摘した。その上で、かつて聖歌隊に属していた70歳以上の高齢者達に、若かった頃の音楽経験についてインタビューをおこなった。その結果、被験者となった高齢者達全員が、当時のポピュラー音楽を全く聞いていなかったこと、併せて、今の若者が決してポピュラー音楽至上主義ではないことを明らかにした。

デボラ (Deborah Sheldon) の研究は、性別と楽器選択の間に見られるある種のバイアス (女性がフルートやクラリネットを専攻し、男性がトロンボーンやトランペットを専攻する) について、大規模な調査をおこなったものである。25カ国、8146人という膨大なデータを分析した結果、こうしたバイアス (偏見) が世界中で認められるものの、日本には全く見られない、むしろその逆である (女性がトロンボーンやトランペットを専攻している) ことを明らかにした。2001年の裏声とジェンダーのシンポジウムでは、パトリシア (I. Patricia) が「日本の女性の声が公の場と私的な場で

使い分けている」ことを指摘した。しかし、今回のデボラの研究は、女「性」の問題について全く逆のデータを示したわけであり非常に興味深い。日本女性の楽器選択は、ジェンダー意識という観点から見ると、世界の先端に位置しているのかもしれない。

水戸氏はポピュラー音楽を覚える際の音楽専攻生と非音楽専攻生の覚え方の違いに着目して、比較実験をおこなった。被験者の音楽経験の条件を厳密に統制して、記憶方略と再生を分析した結果、カラオケ常連の非音楽専攻生の方が、カラオケに行かない音楽専攻学生よりも、少ない回数で歌詞も旋律も正確に覚えること、カラオケに行かない音楽専攻生は、試行を繰り返してもなかなか自分の間違いが直せないことを明らかにした。西洋音楽訓練を長年おこなってきた者が、なかなかポップスを覚えられないというデータは、それだけでもショッキングな結果である。が、さらに重要なのは、カラオケ常連の音楽専攻学生よりも、カラオケ常連の非音楽専攻学生の方が、より早く正確に覚えるということである。ちょっと信じられないような結果である。もし、この結果が正しいとすれば、私たちはいったい何のために苦労して音楽を教えているのだろうか。この他にも、シンシア (Cynthia Benson) 達の個人レッスンに見られた、香港とアメリカの教師指導の違い、ユージニア (Eugenia Costa-Giomi) のピアノ落ちこぼれについての研究なども面白い研究であったが、紙面の都合上、別の機会に報告することとする。

最後に、6年間もの長きにわたってサーチコミッションを務めることができたことを感謝してこの報告を終えたいと思う。皆様、本当に有り難うございました。次回からは水戸氏にバトンを渡します。

# Music in Cultural, Educational & Mass Media Policies in Music Education 及び Community Music Activity ～二つのコミッション・レポート～

滝沢達子（愛知教育大学）

上記の二つの部会が、テネリフェの本大会会場から約30キロ程はなれたリゾート地のプエルト・デ・ラ・クルズにて、それぞれ独自に開かれ、またその会期途上の7月10日の午後の約2時間を、この両部会のジョイントの形で、互いの情報交換の場をもった。そこで、両部会の報告を、コミュニティ音楽部会（通称CMA）のコミッショナー（この名称は13日の本大会での部会の全委員召集会議で指示された）として、そして一方のマスメディア部会（略称）で発表された弘前大学の今田氏のご協力を得て、二つの部会の報告を記述させて頂く。

マスメディアとCMAのジョイントの時間が計画された意図は、特にCMA部会の研究分野が、マスメディア部会の視野と重なる特徴が想定され、二つの各コミッションの会議を行うかたわら、互いの情報交換の時間を共有するのも意味があるという事がひとつの理由。また大会のプレ会議としての7つあるコミッションのあり方の、ひとつのモデルを呈すべく（コミッション会議には出席するが本会議には出ないという最近の会員の動向の是正と、更に部会の規模が肥大化し、ISMEの本会議そのもののあり方が懸念されるという上層部からの危惧への対応として）、CMA部会はその会期をあえて2日間（期間途中の小旅行といった行事や宴会など、ホスト側の便宜供与を得ず、部会の独自企画のペーパー発表と討議優先の形式とした）に短縮し、かつ本大会においても、12日に学校教育・教員養成部会（通称MISTEC）とのジョイントを行うというこれまでにない形式をとった。

本大会でのCMAとMISTECとの共催の意図は、かたやコミュニティ音楽活動の学校教育との関連について、かたや学校教育の観点からコミュニティ音楽活動がどのように取り組まれているか、双方のコミッショナー達によるそれぞれの観点の発表がなされた。ただ事前の時間配分の設定と接点の詰めがされていなかった為、十分な討議にまで至らず、共催の意図がいかされず、この点、今後、改善される必要がある。

【マスメディア部会】（正式名称は上記）、  
7月7日から10日までの4日間

北海道教育大学函館校の尾藤弥生、弘前大学の今田匡彦の両氏を含む計15本（オーストラリア4、香港3、台湾2、中国1、南アフリカ1、ケニア1、スウェーデン1）のペーパー発表がなされた。非西洋圏からの参加者が多い特色ある会議となった。西洋音楽と自国の音楽を含むいわゆるワールド・ミュージックとの2項対立という視点をめぐり、思想・哲学、ポリシー・メイキング、教育実践などの切り口から集中的に討議され、大変充実した4日間となった。また3日目に、コミュニティ音楽活動部会との共催で行われたMartin Comte氏による基調講演は、アメリカ主導のグローバリズムをノンシャランスに批判したブリリアントな発表だった（今田氏）。

【コミュニティ音楽活動部会】

7月9日～11日（委員会議とまとめを含む会期）

元CMAコミッショナーであるJ. Drummond, Einar Solbuという過去の会長の2名が参加予定であったが、実際には

欠席。David Elliot (USA), 元委員で現理事の Kari Veblen (Canada), 元委員の David Price (UK) が同席され, チェアアの Patricia Campbell 女史が, 1984 年の Einar Solbu 氏らによる CMA 立ち上げの歴史を ISME 史に沿う形で省察し, 南アフリカ, カナダ, ノルウエー, そしてスペインに至る CMA 部会で取り扱う観点の変移が述べられた。CMA 立ち上げ当初の目論見は主として学校教育外のコミュニティ活動(特に世界各国に見られる移民の増加に伴う民族グループの観点と成人教育, および就学遅滞児対応としての様々な種類の音楽による指導など)の焦点から, 最近では, 学校教育およびマスメディア部会の視点である文化政策やメディア利用によるコミュニティ活動へと, その研究範囲が拡大してきている状況が述べられた。(わが国でいうなればママさんコーラスや第9合唱の動き, 駅コンサートや病院, シニア施設への音楽コンサート訪問等などの活動もCMAのそれにあたる)。

発表は, 28 の応募から 12 名の発表者(アメリカ, イギリス, カナダ, ニュージーランド, シンガポール, ウェールズ2, アイルランド, シンガポール, 日本, ブラジル)がセレクトされた。ブラジルは残念ながら費用等でキャンセルとなった。日本からは, 私, 委員であるのだが, 部会長からの依頼もあり(98年の南アフリカ大会へ, マレーシア, フィリピン, インドネシア, タイの研究者を連れて参加して以来, CMAのあり方が, ヨーロッパ主導の観点であり, アジア的観点とは異なると批判してきた経緯がある), 以下の題名で, 東京学芸大学の塩原麻里氏とのジョイント・ペーパーとして, それぞれビデオ映写で例証しながら発表した。わが国におけるCMAの捉え方を, 委員としてのコメント程度にと一応のペーパーを用意していたものに, マスメディア部会と学校教育部会とのジョイントの事を鑑みて, 私のペーパーの視点に,

音楽教育界における伝統音楽教材奨励の動きと, 実際のマスメディアにみる伝統音楽番組のBGMが西洋音楽である現状などなどの視点を塩原氏に付言していただく形で, 本大会でも発表させて頂いた。題名は「民謡の教材化にみるコミュニティ音楽活動の意味 - 日本列島北部と南部の民謡の“文化移植”の2例について - (山形県米沢市に移植された沖縄・園田のエイサーとヨサコイ・ソーランの動きにみる世代を超え, 国を超えたコミュニティ音楽活動 - シンガポールとシニア女性グループの活動など)」。

【ISME精神とは?】

今回の本大会はマレーシア大会。CMA部会はシンガポールに決定。ジョホール・バールの国境をめざして汽車ないしバスで, 部会会議の後, マラッカを經由して, クアラ・ルンブールへと移動する計画もしている。「ISMEの視界がようやくアジアに広がってきた」。というのも, '86年に国立シンガポール大学へ1年間研修して以来, ISMEがユネスコ傘下の世界規模の音楽教育の組織であるはずなのに, なぜアジア圏は日本と韓国に限られ, 東南アジアからの参加がないのかと考えてきた。それはまだまだレベルが…。開催能力が…。いやーそれなら, そのような状況を鑑みて多くのアジアからのISMEメンバーを増やす役目をISMEが担っているのではないかと思いつながら, なれば本部のユネスコはどのようにISMEを捉えているのか, '98年にたまたま在外研修でのアパートの近くがユネスコであったので, 歩いて10分のその本部を訪ねて少々驚いてしまった。教育, 芸術文化担当局ともに, ISMEはIMCの傘下にあるので, ISMEの直接の実働状況について把握しておらず, IMCの事務局(ユネスコビル内にある)のK氏(故人となられた)に尋ねるようとの事。更に, 2002年からユネスコ本部主導で, いわゆる学校教育の音楽奨励のプロジェクトが始められているのだが, ISMEが当然関係している

はずなのに、この情報は本大会からも分からない状況にある（理事の方々をご存知なのかもしれないが）。

1982年（英国・ブリストル大会）から会員であるのだが、最近のISMEのあり方（選挙の方法や本大会を部会が危うくするような事態、またよく聞かれる、大学の研究者が対象で小、中、高校教師の為の会議ではない、との意見から伺える部会や研究発表偏重の傾向にある現況）は、当時の印象と大分異なってきたように思う。

50年という歴史を起点に、ISMEが発足した当初の、世界の音楽教育の発展の為にあるISME精神を、再確認する必要があるのではないだろうか。僭越ながら、ISMEの本体の牽引者は、より多くの参加者を引き入れるようヴォランティア精神を

持ち続ける必要があると思うと同時に、少なくとも、個々人のワールドフェイムの為にあるISMEではないはずであり、また会場でさる国のA氏の口からもれた「ISMEはゴルフがあるから楽しい・・・」場であってはならないだろう。

帰国時に、テネリフェの空港で偶然、再会したマレーシアの実行委員の方々は、スペインでの体験から、今後のISMEのあり方、是正すべき点を多く学んだ様子である。すでに2年後のパンフレットも完全なものであり、これぞまさにアジア「Truly Asia」の表紙には、寿司のデザインまで描いている。日本からの参加がもう織り込み済みの勢いが感じられる。いよいよアジア、いやグローバルなISMEが見られる！

## MISTEC（学校の音楽教育と教員養成委員会） 第14回セミナーに参加して

杉江淑子（滋賀大学）

第14回MISTEC（Music In Schools and Teacher Education Commission）セミナーは、7月5日～9日の5日間、歴史の都・グラナダのグラナダ大学教育学部で開催された。プログラムは、「学校の音楽をすべての子どもたちのために（リサーチ）」、「効果的な音楽教員養成（創造性の育成）」、「世界の音楽への理解と尊重」、「学校での効果的な音楽の指導と学習」の4つに分けられ、13本のペーパー発表（14本の予定であったが、台湾からの発表者が台風のため出席できなかった）とワークショップが1つ行われた。

MISTECセミナーの一つの特徴は、音楽の教授＝学習活動の実践の場に即した研

究発表が多く、発表者の国・地域の学校や子どもの状況が生でまるごと伝わってくることである。アカデミックなリサーチという観点からみると、研究方法論的に議論しなければならないことは様々にあると思われたが、それにもかかわらず、いま・その場に存在する学校や子どもの状況が生で伝わってくるというこの感覚はとても貴重なものを感じられた。日頃、私自身は、音楽教育の研究といえども、研究としての科学性やアカデミックな洗練を追求することがやはり必要ではないかと考えているが、しかし一方で、アカデミックなリサーチとしての洗練を求めれば求めるほど、現実の音楽教育の営みから乖離してしまう危険性を

感じることもある。たとえアカデミックな洗練度が高くなくとも、実践の場で生起する子どもの状況をその文脈も含めて「まるごと」伝えようとする発表は、子どもをとりまく社会状況が異なる世界各国の研究者や教育実践者が集う MISTEC セミナーにおいては、むしろ歓迎すべきものといえるのではなからうか。

もう一つ、今回の MISTEC セミナーで画期的なことは、オーガナイザーの尽力により、スペイン語と英語の同時通訳が導入されたことである。このことにより、スペイン語を母語とする人たちの参加がしやすくなり、マドリッド、バルセロナ、バレンシアなどスペイン各地、あるいはお隣のポルトガルから、多くの参加があった。開催地の研究者や現職の教員、学生たちと多く交流できたことは、ISME 世界大会開催地の近隣で開かれることになっている各委員会のセミナーの役割を考えると、たいへん意義深いことであったと思う。実際に、バレンシアから参加した若い学校の先生は、ISME の世界大会は英語使用なので参加しないけれど、今回の MISTEC セミナーは同時通訳がつくということを知って参加したと語っていた。

各ペーパー発表の後のグループ・ディス

カッションは、英語グループ2グループ、スペイン語グループ2グループに分かれて行われ、最後に各グループの報告者がディスカッションの内容を通訳付きで全体にレポートするというスタイルがとられた。もちろん、スペイン語がまるでわからない筆者などは英語グループに参加せざるをえなかったのであるが、ブラジルから参加した友人（ブラジルではポルトガル語が使われる）は、途中からスペイン語グループに参加し、交流をさらに深めたようであった。これも使用言語を英語だけに限定しなかったことから得られた研究交流の広がりの一例といえよう。

同時通訳にかかるコストは決して低くはないであろうが、そこから得られるメリットはコストをはるかに超えて大きい。そのことを、今回の MISTEC の試みを体験して実感した。MISTEC セミナーが、多くの国々の研究者や教育実践者に対して、より開かれたものになっていくためにも、少なくとも開催地域の言語と英語との2ヶ国語を使用言語にする方針を今後もぜひ継続してほしい。また、こうした試みの精神が ISME 本大会の運営にもつながっていけば素晴らしいことだと思う。

## VIVA ISME 2004 !

加藤いつみ

（名古屋市立大学人文社会学部）

私は、7月15日（木）15:00～16:20分まで "Let's play the ocarina" というタイトルでワークショップを行った。当日は、村山ひろみ氏（福山女子短大教授）、佐々木晴代氏（名市大院生）と、そして筒石賢昭氏（東京学芸大学教授）の協力を得て4名で臨んだ。日本からオカリナを15個とテキ

スト20部を用意していった。3時少し前から人が入り始め、すぐに15の席が埋まり、オカリナの数、資料が足りなくなってしまう。

まず、オカリナの歴史から入り、私たちの三重奏で「線路は続くよどこまでも」と、筒石氏の尺八を交えて「月の砂漠」等演奏した。参加者には、「かえるの合唱」「月の光」「カッコー」「ほたるこい」の二重

奏の楽譜を用意した。最初の練習課題の幹音，Fis，B音の運指もすぐに習得され，4曲とも見事に演奏された。予想を越えた出来ばえにすっかり気をよくし，再来年も"Let's play the ocarina"のPart 2をやりたいな，と思っている。

尾藤弥生  
(北海道教育大学)

私は，今回初めて Music in Cultural, Educational & Mass Media Policies in Music Education と Community Music Activity のコミッションセミナーに参加しました。実は2002年のベルゲンの本大会に初めて出席し，今回も出席してみたいということがきっかけで，発表用の概要の提出にアプローチしました。(実は，ISMEのインターネットのページを探したのですが，あまりに多くの説明があり，どこに提出するのがふさわしいのか，十分理解できていないまま提出したというのが本音です。)

さらに，英語の苦手な私がアプローチしたことは，実に無謀でした。偶然にも同じセミナーに英語の得意な今田匡彦先生(弘前大学)が参加されていたので，質疑応答の通訳をしていただき，そのおかげで，何とか無事発表を終えることができました。しかし，そうでなかったら大変なことになっていました。

今回参加したことで，海外の現状が少し分かり世界が広がり，また，自分の研究についてご意見をいただくことができ，とても勉強になりました。そして，多くの国々の方々と顔見知りになることが出来(話せないのですが)とてもよかったです。今後は，この多くの刺激を生かしてゆきたいと思っていますところ です。

近藤真子  
(Oakland University 院生)

テネリフェ，海沿いのモダンな建物にて世界各国からの音楽，音楽教育関係者の方々

とお会いし，対話し，また今年には発表する機会も頂き，大変有意義な5日間を過ごすことが出来た。大会テーマは"Sound Worlds to Discover"。私は，個人的興味から，様々な国のプレゼンターによるワークショップを中心に参加，まさに discovering the world of sound である。

大学の同僚であるアメリカ人，Deb とのワークショップ形式の発表では，まず，多様で豊かな，自国や世界の音楽をいかに子どもたちに伝えていくか，理論的に探り，最終的には，参加者の方々に，即実践して頂けるような内容をということで，日本の作品を教材化，シェアした。Deb とのワークショップ準備過程でのディスカッション，英語がネイティブでない方々を相手の発表，出会った方々から頂いた様々なご助言，激励のお言葉，全て私にとっては，非常にありがたく，貴重な体験だった。

参加の感想として，西洋音楽の影響を強く受けた教育システムの中で模索し続けられてきた世界の音楽教育は，将来，国際社会に生きる子どものために，更に音楽の国際化という新たな扉を開き，人間の営みの中での“音楽”を扱う教育としての色彩を濃くしているように感じた。

鈴木慎一郎

(兵庫教育大学連合大学院院生)

初めて参加した ISME。出発前に指導教官から「音楽がいっぱいあるよ」とは聞いてはいました。しかし，こんなにも音楽に満たされている学会とは思いませんでした。オープニングセレモニーはもちろんのこと，昼や夜にはコンサートが数箇所で行われていました。学会に参加する人たちだけではなく，島の人々も音楽に親しむことができるように，町の屋外ステージでもコンサートが開催され，島中が音楽に包まれていました。

論文発表やワークショップの中でも実際に楽器を持ち込んだり，実演をしたりと，

音楽を交えて行われる場合が多かったです。今回はスペイン語の発表もいくつかありましたので、そこにも参加しました。スペイン語の全く分からない私に対しても、発表者は色々と気を使ってくださいました。ボディーパーカッションのセッションでは一緒に体験することができ、大いに満足して帰ってきました。

なお期間中、若い研究者や教師たちが集まる場として、"Student Meeting" が用意されていました。お互いに自己紹介をした後、どのような研究をしているか等意見交換をする場でした。

次回はマレーシア。そのときは発表できるよう研究を深め、語学力を高めておきたいです。

渡邊仁美

(国立音大学学校教育専修3年)

ISMEの第27回テネリフェ大会(2004年7月11日~16日)に日本人の学生として個人で参加しました。世界各国の伝統音楽に触れて、多種多様な音楽観や表現手段、そしてその背景にある生活習慣や文化を学ぶことができました。今回の発表では、アフリカ音楽やアジア音楽をテーマにした発表が多く見受けられましたが、日本の伝統音楽に対する海外の関心の高さを改めて感じました。ただ時期や開催地の場所的な問題もあって、学生の参加者が少なかったことが残念です。次回の大会には多くの学生が参加し、異文化交流を図って欲しいと思いました。きっと新たな価値観や音楽観が生まれると思います。



「2006年大会はマレーシア・クアラルンプールだ!」とばかりに盛り上がる  
クロージングセレモニー(写真提供:小川容子)

# 日本音楽教育学会第 35 回全国大会のお知らせ

2004 年 11 月 13 日(土), 11 月 14 日(日)

会場: 武蔵野音楽大学(東京都練馬区)

大会実行委員長 坪能由紀子(日本女子大学)

本年度の大会について、お知らせ申し上げます。

シンポジウムは『これからの音楽教育学研究を考える - 音楽教育学への新たなアプローチ -』(13 日, 土)というテーマで、企画・司会は山本文茂氏(東京藝術大学)、シンポジストは徳丸吉彦氏(放送大学)、佐野靖氏(東京藝術大学)、西平直氏(東京大学)、森田恭子氏(武蔵野音楽大学)を予定しています。

基調講演にはイギリスを代表する音楽教育学者であるキース・スワニック氏をお迎えします。

常任理事会の企画によるプロジェクト研

究は『新しい学習評価と音楽科の学力』と題して、司会を藤澤章彦氏(国立音楽大学)、パネリストに高須一氏(文部科学省初等中等教育局教科調査官)、小山真紀氏(立教大学)、和田崇氏(東京都江戸川区立瑞枝中学校)をお願いしています。

武蔵野音楽大学では、ミニ・コンサートを企画していただいています。

また、多くの個人発表とともに、5つの共同企画が会員諸氏によって行われます。会員のみならず多数の参加を願っております。

詳しくは、9月初旬にお手元に届く予定の『大会プログラム』をご覧ください。

## 全国の院生のみなさん、《院生フォーラム》に参加しませんか？

日本音楽教育学会第 35 回全国大会において、昨年に引き続き《院生フォーラム》を開催いたします。今回はポスターセッションという形で行います。院生の皆さんは、日頃から地道に研究を重ねられていることと思います。しかし、その成果を学外で発表する機会は、そう多くはないのが実状ではないでしょうか。今回、皆様の日頃の研究の成果を、院生フォーラムにおいて発表しませんか。大会に参加される皆様から幅広く意見をいただくことで、研究を伸展させていく貴重な機会になると思います。いろいろな方面からの助言や情報提供をいた

だくことで、今までは思いつかなかった視点に気づかされたり、新たな可能性が見えてくるかもしれません。

通常は、ある程度研究がまとまった段階にならないと、学会など外部で発表することはないようですが、今回、院生フォーラムのポスターセッションは、途中段階にある研究でも発表することができる企画にしました。「このような研究をしています」「このテーマでこういう手法で研究を始めるつもりです」「この研究において、こういう問題にぶつかって困っています。」など、「まとまっていない段階での発表」を

していただくことも可能な企画にします。  
(もちろん、「まとまった段階での発表」  
も大歓迎です!)演奏等のパフォーマンス  
も大歓迎!

全国に音楽教育の研究をしている院生は  
沢山いますが、学外の院生と広く全国的に  
交流を持つ機会は限られているため、お互  
いの研究を知る機会も多くはないのが現状  
と思います。「自分はこのような研究をし  
ている」ということも、各々が積極的に発  
信しなければ、多くの人の知るところとは

なりませんし、お互いにどのような研究を  
しているのかを知らなければ、情報を交換  
することもできません。院生フォーラムで  
の研究発表を通して、院生がお互いの研究  
について知り合い、情報交換や意見交換を  
するネットワークを拡げていきたいと思  
います。

修士課程・博士課程在籍の皆様、また昨  
年度大学院を修了された若手研究者の方、  
是非院生フォーラムにご参加ください!

<院生フォーラムの日時・場所・参加希望の申し込み方法>

日 時 : 2004年11月14日(日) 11:30~12:30

場 所 : 武蔵野音楽大学内

申し込み先 : 下記まで電子メールでご連絡ください。

IZU01006@nifty.ne.jp (藤波ゆかり)

申込締切日 : 発表を希望される方は、9月30日(木)までにお申し込みください。

お申し込み下さった方には、追って詳細についてご連絡いたします。

担 当 者 : 藤波ゆかり (東京芸術大学大学院音楽研究科音楽学音楽教育専攻修士課程)

平成 15 年度修士論文題目 (追加分)

国立音楽大学

下平まり子 音楽科教育における和楽器を用いた表現活動について

~ 楽曲・楽器の代替や洋楽器を併用した指導分析を通して ~

\*\*\* 編集後記 \*\*\*\*\*

格別に暑い夏だった。例年ならツクツクボウシで賑わっている頃である。しかし、今年  
はまだ一声も聞かない。さて、ISME は 50 周年。日本からの参加者は、分野別委員会の  
委員を務める方、研究発表やワークショップをする方など、なかなかの活躍であった。そ  
んな雰囲気を与えたく、ベテランの方から学部学生までさまざまな参加者に原稿をお寄せ  
いただいた。次回はマレーシア。時間的にも経費的にもうれしい。この機会にご参加を!

(北山敦康)

\*\*\*\*\*

【日本音楽教育学会役員（2002-2004年度）】

会長：村尾忠廣 副会長：平井建二・坪能由紀子

常任理事：北山敦康（事務局長），奥忍・藤沢章彦・筒石賢昭（総務），  
加藤富美子・島崎篤子・丸山忠璋（企画）重嶋博・杉江淑子（会計）

理事：浅井良之（北海道），丸林実千代（東北），伊藤誠・今川恭子・  
小山真紀・阪井恵・山本文茂（関東），伊野義博（北陸），南曜子（東海），  
中原昭哉・竹内俊一（近畿），野波健彦・吉富功修（中国），  
田邊隆（四国），木村次宏（九州）

【事務局住所】 ☎ 184-0015 東京都小金井市貫井北町 2-5-22 ハイツシーダ 1-102

【私 書 箱】 ☎ 184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://www.soc.nii.ac.jp/jmes2/index.htm>